

少年居留地の少年 海野 順風

青島が日本軍の手に陥落して間もなく、青島一帯に日本の軍政が敷かれて、日本の内地からどしどし多数の日本人が入り込むと、今まで獨逸人の町であった青島の市街には急に山東通りとか静岡町、停車場のある千葉町のやうに日本の町の名が付くと同時に、市街の公共の建物や、公園、海水浴場など、盡く日本人が大手を振つて出入りするやうになつて、

何處もかも眼に見えて日本人の数が殖えて行つた。獨逸人が建て、獨逸の教師が教へて獨逸人の子供達ばかりが通つてゐた丘の上の立派な獨逸小學校の建物も、やがて、其處の教場には日本人の教師が立つて、其處の黒板には「アイウエオ」とか「神武天皇」とかいふやうに日本の國語

が白墨で書かれ、二符の鷲が大きく翼を擴げてゐる獨逸の紋章が厳しく刻みつけられた其處の校門は、毎日日本人の子供達が賑かに日本の歌を唱ひながら出入りしてゐた。

では、今まで其の丘の學校へ大威張で通つてゐた獨逸人の子供達はどうかしたのだらう？ 皆獨逸の本國へ歸つて仕舞つたのだらうか？ いや、まだ青島には、日本へ送られた俘虜の軍人の遺族や、町に遺つてゐた商人達の子供達が大勢残つてゐたのであつた。その子供達は詮方なしに街外れの教會堂を學校として、毎日不自由ながら獨逸の教師から毎日の學科を教はつてゐたのだつた。

其の教會堂へ通ふには道順が、元の獨逸小學校、今の日本小學校の傍を通らねばならなかつたから、獨逸の生徒達は毎

日學校への行き歸りに、此の間まで自分達の通つた學校の運動場で、日本の生徒達が元氣よく遊んでゐる姿を見たり、涼しさを窓掛けが動いてゐる教室から聞えて來る愉快さうな唱歌の聲を聞いたりする度に、どんなに忌々しく思つたり腹立しく思つたかしれなかつた。何時も其の道を通る時に

てゐるやうに氣味悪く見えるので、やはり獨逸の少年達に對してもいゝ感じは持てなかつた。向ふが『何だい日本人が』と思へば、此方でも『何だい獨逸人が』と思ふやうに、知らずくゝの裡にお互ひに敵視し合ふやうになつゐた。今一つ、青島の街には、支那人の子供だけ教へる支那の學



はいかにも口惜しさうに教室を見上げて眺みつけて行くのが常であつた。

日本の生徒にしたところで、やはりさうであつた。途中で出逢す獨逸の少年達が自分達を見る眼が、何だか恨みを持つ

校があつた。この學校に通學する支那の少年達は元から獨逸の少年達を憎んでゐた。丁度今の日本の少年と獨逸の少年との間のやうにやはり敵視しあつてゐたのだつた。そこへ日本の少年達が加はつたのだから、この日本、獨逸、支那の三國

の少年達は、お互に三方から意地悪い睨合ひをしてゐた。

二

或る時、どうかした機みに日本の少年と支那の少年とが途中で打つかり合つて喧嘩をした時、

『何だい、ちやんころ！』

と罵つた言葉が、支那の少年には「ちやんころ」といふ言葉の意味がどんな事なのか解らなかつた。支那の少年は多分『馬鹿やい』といふ位の事だらうと思つたので、すぐに日本の少年に向つても

『ちやんころ！』

と罵り返した。

『やあい、自分でちやんころツて言つてらあ、このちやんころ！』と

囃し立て、



も

『ちやんころ！ちやんころ！』と支那の少年は負けずにちやんころを連發した。

それから直ちに、このちやんころといふ言葉は支那の少年達にも、獨逸の少年の仲間にも『馬鹿、馬鹿！』といふやいな意味で流行りだして、其後、日本、獨逸、支那の少年が會つて喧嘩を始める時には、何時もお互に、

『ちやんころ、ちやんころ！』

と相手を罵り合つてゐた。そしてお互に隊を組んでは

み合つて、出會へすれば、衝突が絶間なく起つた。

三

夏の或暑い日、學校の退る時刻か

青島の全市
街は遽に大
暴風雨に包
まれて仕舞
つた。

軒並に赤
い獨逸瓦を
葺いて青い
雨樋を懸け
兩側の歩道
には桃色の

砂を敷詰めて、アカシヤの街路樹の美しい大通りも、暴れ狂ふ雨と風と雷の打ち合ひにはかなはないで、窓といふ窓は盡く堅く錠戸が下されて、人々は部屋の間小高く寄合つて慄へてゐた。一時は交通機關までが杜絶えた程の荒れ方だった。

その暴風雨の眞最中、丘の麓の堀立小舎見たやうな小さな軒家の中に、三人の日本の少年と四人の獨逸の少年と、二人の支那の少年とが、やはり募り行く暴風雨の渦巻く音に耳を掩ふて慄へてゐた。



此九人の少年は何れも小學校の歸り途で、學校の退ける頃から募りだした暴風雨を、早く家へ歸りたい一心から、先生の

留めるのもきかずにてんでに校門を走り出したのだつた。そして丘の途中へ来る頃には、それ程と思はなかつた雨と風は急に暴れ始めて、學校を出ては他に一軒の避難場所のない丘を、後突く雨にたゞかれながらやうやく丘の麓のこの一軒家まで駆け込んだ。この一軒家は元は丘へ散歩に来る人達が一寸休んだりお茶位飲む爲に建てられた休み茶亭だつたのが、青島が日本の手に移ると同時に、住む人もなくて入口の扉も窓の錠戸も閉ざされたまゝ捨て置かれた家だつた。

九人の少年は、てんでに二人三人つゞ此家の壊れかゝつた

庇の下へ逃げ込んで来たのだつたが、段々雨も風も強くなつて果は氣味悪い雷や稲妻まで暴れたしたので、居たゝまれなくて、閉ざされた扉をこじ開けて薄暗いガランとした室内へ這入込んでしまつた。

九人は先に書いやうに、お互に敵同士のやうに憎みあつてゐた三國の少年であつたから、暴風雨の爲に偶然この一つ家に落あつたとはいふものゝ、やはり敵意を持ち合つてゐた。喧嘩こそ始めなかつたが、お互に睨み合ひのまゝで、一團づゝになつて、微臭い不氣味な部屋の隅々に別々に陣どつてゐた。

かうして九人が、怖ろしい暴風雨の中に戦慄へながら、底氣味悪い眼と眼を合せて、不安な一時間ばかりを流したが、なか／＼雨も風も収まりさうにもなかつた。それ處か雷まで加はつた外の景色は層一層烈さを増して行つた。青白い凄い雷光は折々鎧戸の隙間や、壊れかゝつた板屋根の間から少年達を怖やかすやうに射り込んだ。それでもまだ三國の少年はお互に口を開かうともしなかつた。

と、天地を覆すばかりの雷鳴と一緒に、小舎を揺がす烈風が搔ねると思ふ間もなく、凄まじい音響と共に板屋根の一部がめくり取られて、窓も扉も一勢に内側に吹き開かれて、雨

水は瀧のやうに室内へ灌ぎ込んで来た。

少年達は思はず窓や扉にかぶり付いて、必死に堪へた。其の儘にして置いたら小舎は吹き潰されるかもしれないなかつた。さうなるともう九人の少年には、お互の憎しみも敵意も無くなつて仕舞つてゐた。お互に力を協せて暴風雨と戦ふばかりだつた。

「おい、確り押へろ!!!」

「大丈夫だ」

「そら、向ふの窓が危ない、も一人行つてやれ」

「君も少し右へ寄らないと雨が頭へかゝるぜ」

「風に負けるな、も少しだ!!!」

こんな事をしてんでに、日本の少年は日本語で、獨逸の少年は獨逸語で、支那の少年は支那語で、口走つて闘し合つた。お互には解らない違つた國の言葉も、心を協して必死になつてゐる九人の少年には、心の中では解し合つて、皆が皆の命令通りに立働いた。

かうして三國の少年達が必死に防いでも、暴風雨はいつかな鐘まりさうにもならなかつた。

その中に鎧戸が風の爲に千切れ飛んだり、天窓の硝子戸が落ちて來たりして、九人の中五人までも手頭や、腕や、額



等に傷を受けた。それでも皆挽
ますに扉や窓を押へ続けた。

「君、痛むだらう。少し休みたま
へ」

「何大丈夫だ」

「まだ血が止まらないかい」

「なるたけ僕の身體の隙になるや
うにしたまへ」

「ホラ、また光つた。大きい雷が
鳴るぞ」

恤はつたり蹴ましたりしながら
ら、傷つかない少年は傷ついた少
年の傷の手當をも怠らなかつた。
學校の教科書を包んだ風呂敷を引
裂いたり、洋服の襟のネクタイを
引捲つたりして夫れ／＼傷口を縛
つた。連も充分な手當は出來ない
ので、たゞ血の流れ出すのを止め
るに過ぎなかつたが、一通り手當
をした少年は再び雄々しく起上つ

て再び扉や窓に取附いた。傷の腕に力を入れたりするので、
直に血は繻帯の上に染み上つた。

さしも吹暴れた暴風雨も三時間ばかり経つと、どうやら鎮
まつた。硝子の壊れや羽目板の千切れや、風に飛んで来た生
々しい青葉の小枝の取散らされた床の上に、頭から雨水を浴
びたやうに濡れそぼられた九人の少年はへと／＼に疲労し
きつて倒れてゐた。

然し倒れながらも九人は一つ處に確り抱き合つてゐるの
だつた——傷を受けた少年の傷口は傷を受けない少年が兩
手に固く押へて。

此の日から、「馬鹿やい」の代りに三國の少年の間に使はれ
てゐたあの嫌な言葉は無くなつてしまつた。其ればかりでな
く、三國の少年達の心にあつた嫌な敵意も憎みも何處かへ消
えてしまつて、途中で出會ふ少年達は、何時も少年らしい無
邪氣な晴やかな顔を合せて微笑し合ふまでになつた。そし
て、

「失敬!!!」と言ひながら、一寸帽子の底の處へ右手を上げる
擧手の禮が、あの嫌な言葉の代りに三國の少年達の間に流行
り始めた。